

鎌倉女子大学・鎌倉女子大学短期大学部
データサイエンス・AI学修プログラム
令和7年度 自己点検・評価報告書

1. 学内からの視点

1-1 プログラムの履修・修得状況

教務委員会において、継続的に本プログラムを構成する授業科目の履修・修得状況の把握と分析を実施し、履修制度の改善、教育成果の確認、履修率向上のための方策を協議する。

〔リテラシーレベル〕

令和7年度の新規履修者数は、大学267名（家政保健学科81名、管理栄養学科57名、児童学科31名、子ども心理学科21名、教育学科77名）、短期大学部9名（全て初等教育学科通信教育課程）である。同年度の修了者数は、大学98名（家政保健学科14名、管理栄養学科34名、児童学科27名、子ども心理学科17名、教育学科6名）、短期大学部2名（全て初等教育学科通学課程）であった。令和7年度に開設された短期大学部初等教育学科通信教育課程については、プログラムを構成する授業科目に配当学年が2年生のものを含むため、今年度の修了者数の実績はない。

〔応用基礎レベル〕

令和7年度の新規履修者数は79名（家政保健学科61名、管理栄養学科18名）である。本プログラムは令和6年度から開始し、プログラムを構成する授業科目に配当学年が4年生のものを含むため、今年度の修了者数の実績はない。今後はリテラシーレベルを修了した対象学科の学生に対して、応用基礎レベルの履修継続と修了に対するサポート体制を継続して整備する。

1-2 学修成果

学修成果の把握については、本プログラムを構成する授業科目におけるアンケートに加えて、学事調査研究センターが全学生を対象に毎年度実施する「学修環境・行動調査」の結果を活用する計画である。入学後の知識・能力の変化に関する調査項目のうち、「数量的スキル」「情報リテラシー」「論理的思考力」に関する調査結果を分析することで、本プログラムの学修成果の定量的な把握が可能である。

本学の学生が継続的に参加している「神奈川産学チャレンジプログラム」をはじめとした、データサイエンス・AIの素養が必要とされる課外活動の成果についても、本プログラムが実践的な活動に寄与するかを評価するための指標としての活用を検討する。

令和7年度9月に文部科学省が公表した、令和6年度「全国学生調査（第4回試行実施）」の結果では、家政学部における「数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能」がポジティブリスト（13位）に掲載され¹、本プログラムの学修成果は学生から一定の評価を得ていることが確認できた。

1-3 学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度

全学の授業科目を対象として実施している「授業改善アンケート」に加えて、本プログラムを構成する授業科目では、内容の理解度の調査を含めた独自のアンケートを実施する。

¹ https://www.mext.go.jp/content/20250930-koutou02-000001987_2.pdf

〔リテラシーレベル〕

昨年度に引き続き、本プログラムを構成する2つの授業科目の履修者に対するアンケートを実施し、モデルカリキュラムに対応した審査項目に関する理解度の自己評価を調査した。結果として、全審査項目の平均は「情報リテラシー」では91%、「数と統計」では88%の履修者から肯定的な回答（それぞれの内容について理解ができたかに対して「とてもそう思う」・「そう思う」の合計回答数）が得られた。この結果から、モデルカリキュラムの導入・基礎・心得に関する学修目標は達成していると評価できる。

〔応用基礎レベル〕

先に述べたように、本プログラムを構成する授業科目のうち、リテラシーレベルと共通する2つの授業科目でアンケートを実施し、理解度に関しては良好な結果が得られている。

令和7年度に開講した応用基礎レベルの授業科目は「生活情報論」のみであったが、履修者に対して授業で扱った応用基礎レベルのモデルカリキュラムの学修項目（15項目）に関する理解度の調査を実施した。学修項目ごとに理解度を5段階（「5：とてもそう思う」・「4：そう思う」・「3：どちらともいえない」・「2：あまりそう思わない」・「1：全くそう思わない」）で自己評価した人数の分布と平均値を次に示す（回答者数23名）。

生活情報論 学修項目別の理解度（23名）

1. データサイエンス基礎	5	4	3	2	1	平均
1-1. データ駆動型社会とデータサイエンス（☆）	5	17	1	0	0	4.2
1-2. 分析設計（☆）	7	14	2	0	0	4.2
1-3. データ観察	4	15	4	0	0	4.0
1-5. データ可視化	3	19	1	0	0	4.1
1-6. 数学基礎（※）	2	8	7	6	0	3.3
2. データエンジニアリング基礎	5	4	3	2	1	平均
2-1. ビッグデータとデータエンジニアリング（☆）	3	13	6	1	0	3.8
2-2. データ表現（☆）	2	12	7	2	0	3.6
2-3. データ収集	2	12	7	2	0	3.6
2-6. ITセキュリティ	7	11	4	1	0	4.0
3. AI基礎	5	4	3	2	1	平均
3-1. AIの歴史と応用分野（☆）	3	15	5	0	0	3.9
3-2. AIと社会（☆）	7	14	2	0	0	4.2
3-3. 機械学習の基礎と展望（☆）	5	11	5	2	0	3.8
3-4. 深層学習の基礎と展望（☆）	3	9	7	4	0	3.5
3-5. 生成AIの基礎と展望（☆）	5	9	7	2	0	3.7
3-10. AIの構築・運用（☆）	4	12	6	1	0	3.8

☆：コア学修項目 ※：基盤となる学修項目

理解度の分布の全体傾向として、数学的な要素が必須となる学修項目（1-6・3-4）については低く、日常生活に関わりが深い学修項目（1-1・3-2）と、視覚的にわかりやすい講義・演習が実施できた学修

項目（1-2・1-3・1-5）は高くなっている。来年度以降に開講が予定されている応用基礎レベルの授業科目においても、数学的な要素が必要となる学修項目については、講義と演習の工夫が必要となる。

モデルカリキュラムの学修項目に準じた内容の理解度については、調査・分析を継続する。

1-4 学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度

履修者に実施するアンケートに、「この授業を後輩や他の学生に推奨しますか」という調査項目を設けることで、定量的な評価を行う。

令和7年度は「数と統計」と「生活情報論」の履修者に対してアンケートを実施した。結果として、「数と統計」では71%の履修者から、「生活情報論」では91%の履修者から、肯定的な回答（「他の学生に受講を強く推奨する」・「他の学生に受講を推奨する」）が得られている。

1-5 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況

本プログラムをより多くの学生に周知するため、各種オリエンテーションにおける説明時間の確保や、プログラムを紹介するWebページの内容を充実させるといった、学内広報を継続的に強化する。

令和7年度は、プログラムを紹介するWebページの内容に「就職活動等での活用」の項目を追加し、本プログラムの履修が就職活動等に活用できることを周知する試みを実施した。

本年度までの累計履修率²は、リテラシーレベルについては大学で25%、短期大学部（通学課程のみ）で16%、応用基礎レベルについては21%であり、本プログラムの認定申請時における令和7年度の予定履修率を達成した。初等教育学科通学課程における履修率向上に向けた対策として、令和8年度から実施予定の初等教育学科「DX時間割³」の対応科目に、リテラシーレベルの「数と統計」を指定し、履修率の向上を目指す。

2. 学外からの視点

2-1 教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価

本プログラムは令和6年度から開始し、令和7年度はすべての修了者が在学中であるため、卒業後のデータに基づく評価結果は得られていない。

今後は、就職センターが実施している「卒業生調査」などを活用し、本プログラムの修了者の卒業後の調査を継続的に実施し、進路や活躍の状況などについて確認を行う。

2-2 産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見

本プログラムの教育内容を改善することを目的として、就職センターが実施している「卒業生調査」への設問の追加や、産学連携の実績がある企業などを対象としたアンケートや意見聴取などを行う。

令和7年度は、2月に実施された「学内合同企業セミナー」に参加した企業を対象としたアンケートに、任意の回答項目として「本プログラムに対し、企業からの視点での提言や改善点、期待など」を追加することで意見聴取を実施した。産業界からの視点として、多様な業種においてデータサイエンス・AI分野の基礎的能力の必要性が認識されており、本プログラムに対して一定の評価を確認できた。具体的な記述の例（抜粋）を次に示す。

² 数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度の申請様式の算出方式による。

³ https://www.kamakura-u.ac.jp/faculty/curriculum_dx/index.html

弊社の事業（飲食、アミューズメント、ホテル）の運営においてもデータサイエンス、AIに関して切っても切り離せないものとなっております。作業効率（無駄の排除やデータ分析など）を上げ、思考し、どう提案し、運営力を磨いていくか。実務の中で活かせるAIとの付き合い方などは学生時代から学べる環境があるのは学生にとって有力と考えております。

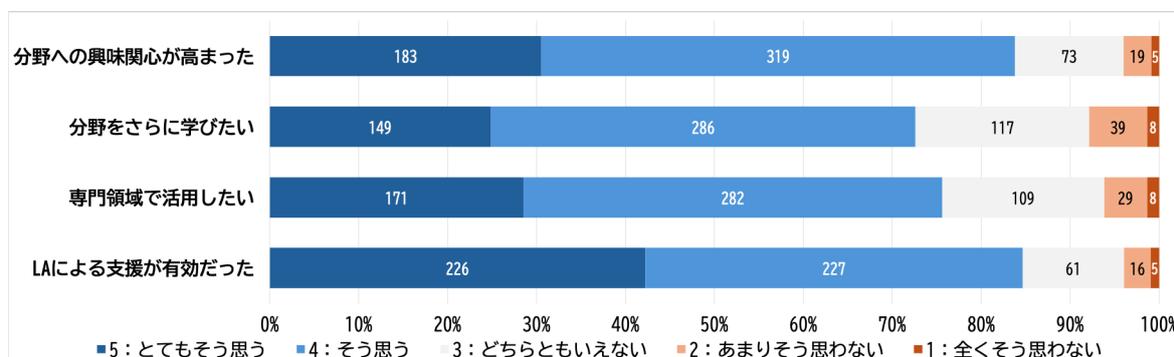
御校の「データサイエンス・AI学修プログラム」は、社会で求められるAI・データ活用の基礎力を育成する大変有意義な取り組みだと感じております。弊社でもDX推進の一環としてAI活用を進めており、今後は厨房業務においてもAI技術の導入がさらに広がると考えております。学生の皆様が在学中から情報を適切に取捨選択し、活用する力を身につけられることは、企業としても大きな期待を寄せております。

基礎的なデータ分析からAI活用まで幅広く学べるカリキュラムは、社会で求められるスキルセットと合致しており、学生の皆様が将来多様な分野で活躍されることを期待しております。文理を問わずデータリテラシーを育成する取り組みは、企業にとっても価値が高く、実務においても大いに活かされる力につながると考えます。今後、本プログラムで学ばれた学生の皆様が、データに基づいた意思決定や課題解決に寄与されることを楽しみにしております。

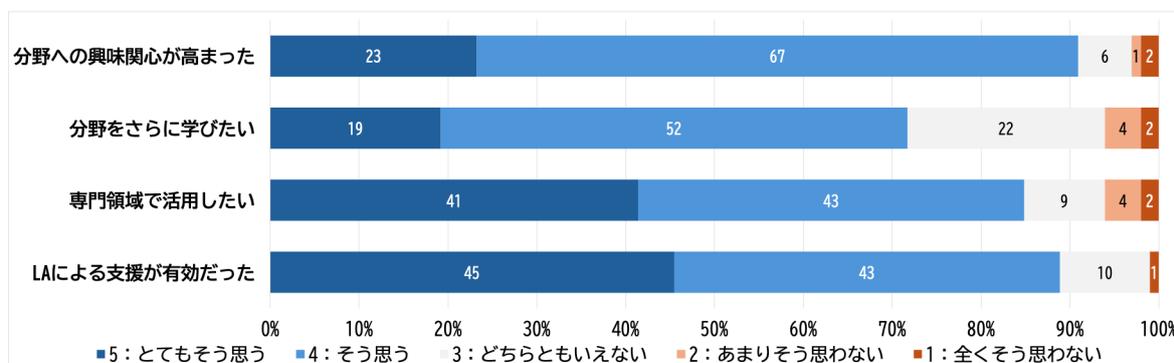
3. その他

3-1 データサイエンス・AIの分野とLAIに関するアンケート結果

昨年度から継続して、本プログラムのリテラシーレベルと応用基礎レベルに共通する2つの授業科目（「情報リテラシー」と「数と統計」）で独自のアンケートを実施した。



情報リテラシー アンケート結果（599名 ※LAI支援については通信課程の学生を除いた535名）



数と統計 アンケート結果（99名）

アンケートの結果では、履修者の80%以上がデータサイエンス・AIの分野に対する興味関心が高まったと回答（「とてもそう思う」・「そう思う」の合計回答数）している。

同上のアンケートにおいて、「情報リテラシー」では73%、「数と統計」では72%の履修者が、データサイエンス・AIの分野をさらに学びたいと回答（「とてもそう思う」・「そう思う」の合計回答数）している。授業内容や教育方法の工夫を行い、同分野を「さらに学びたい」と考える履修者の割合を増やすことが、継続した課題である。

データサイエンス・AIの分野を各自の専門領域で活用したいと回答（「とてもそう思う」・「そう思う」の合計回答数）した履修者は、「情報リテラシー」では73%、「数と統計」では85%であった。特に「情報リテラシー」では、基礎的な内容が中心となるため、講義や演習を通じて、各自の専門領域での活用のイメージを具体化することが重要であると考えられる。

本プログラムの実施にあたり、従来から一部の授業に配置されていた専任助手による演習補助に加えて、学部生を中心とした演習補助者である「ラーニング・アシスタント（LA）」の制度を継続している。アンケートでは、「情報リテラシー」の履修者の85%、「数と統計」の履修者の89%がLAによる支援が有用だったと回答（「とてもそう思う」・「そう思う」の合計回答数）しており、学修支援に関するLAの有効性は継続して確認できている。

3-2 数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること

本プログラムを構成する授業科目では、反転授業をはじめとした様々な教育方法の工夫を積極的に取り入れ、履修者の意欲を引き出し、当該の分野の学びの楽しさと、実社会とのつながりを通じた学びの意義を実感できるような授業を実践している。

〔リテラシーレベル〕

「情報リテラシー」では、昨年度に引き続き、オープンデータや生成AIの活用をテーマとした演習を取り入れ、データサイエンスやAIがどのように実社会と関連しているかを楽しみながら学べる工夫を行った。来年度は、学生に身近な実データを用いた内容の追加を計画しており、実社会とのつながりを意識しながら、学ぶ楽しさをより深く実感できるカリキュラムに更新を予定している。

「数と統計」では、対面授業とオンライン学修を併用した方式で、授業モデルの継続的な改善を実施し、成果を上げている。改善の事例は、令和7年度のFDセミナー「DXによる効果的で質の高い学修の実現に向けて」で発表を行い、学内外に対する発信・共有を実施した。

〔応用基礎レベル〕

本年度に開講した「生活情報論」では、1-3で述べたように数学的な要素が必要な学修項目の理解度に関する自己評価が低いという課題が明らかになった。数学的な要素に苦手意識がある学生も多いため、学ぶ楽しさや、実社会との結びつきなどの学びの意義を見出せる工夫を継続的に行い、有効性を検証する。

3-3 内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること

全学の授業科目を対象として実施している「授業改善アンケート」に加えて、本プログラムを構成する授業科目で独自に実施している理解度に関するアンケートを継続して行い、授業の内容と教育方法に関する改善を継続する。

内容の理解度に関するアンケート結果については、「情報リテラシー」と「数と統計」の双方で良好な結果が得られているが、応用基礎レベルを構成する授業科目は、専門性も高まり、学修すべき内容・水準はより高度になる。アンケート結果の分析を継続しながら、ラーニング・アシスタントの支援体制等についても継続して強化を行い、授業の「分かりやすさ」を向上させる計画である。